



TITLE:

花山だより(10月・11月)

AUTHOR(S):

月斗

CITATION:

月斗. 花山だより(10月・11月). 天界 1935, 16(176): 66-66

ISSUE DATE:

1935-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167142>

RIGHT:

花 山 だ よ り (10月・11月)

十月に入つて、晴天続きで稻葉先生は測微器に依る重星の観測に、柴田先生は、恒星スペクトルの寫眞觀測に精勵されてゐる。太陽館では荒木(九)、堀井、高倉先生の太陽の眼視、寫眞研究が續行され、氣象の方面は中村先生の擔當で配線變更後故障も少なくなつた。二三年來頗る好調を示してゐた、シンクロノム時計は近頃何處からか空氣が入る様になつたので、内部の掃除を兼ねて来る12月4日から修理に着手する豫定である。山本先生は豫ての計畫通り10月9日 京都發、朝鮮滿洲、北支の天文視察の途に着かれた。詳細は急報181號に既報された如く、天文資料の研究、滿洲國時刻制の改革問題、來年の日食對策等が主要目的であつた。協會の10月例會は約50名の盛會で稻葉先生の「土星を語る」は、土星輪の起源、來年度に見える珍らしい輪の直線狀の問題等頗る興味ある事項が多かつた。次で公文先生の「星團の話」は一般の星團常識と云つた様な星團の概念に就ての話があつた。月末頃、東北大學の松隈教授が來阪の節立寄られたが、同大學では國產の30cm シーロスツツトを完成、來年の日蝕に備へる様に承はつた。尙此の器械では一日中觀測の出来る様に特別な移動裝置が考案されたとの事である。十月來から東山の秋色探望を兼ねて花山を見學する方が多いが、何れアンテナに寒風荒む木枯の節ともなれば、絶えて人無く徒にシリウスの光のみ物凄く天界に君臨する事であらう。11月初めマツダの電氣時計を購入し、其の結果を見ると約30秒以内の遲速があつて、之が正負不同の爲め實用程度以上に出ない事が分つた。11月の協會總會は大塚本社で舉行、花山からも多數出席し、協會の有力者の方々も多數列席されて稀に見る盛會であつた。百濟山本兩先生の御講演は來る可き日蝕を待望する聴衆に多大の感銘を與へた。同日花山では稻葉先生が講演並びに公開觀測を擔當され、約60名の見學者があつた。24日は倉敷の創立9週年に當り、花山より、山本、荒木(健)、高城先生が列席され、紀念講演會の催があつた。末筆ながら高城先生は今度結婚されて、市内左京區田中里之内町九に新居を持たれる様になつた。一同心からの祝意を捧げる次第である。 11.27.

(月斗生)